

ごはんはく質の取りすぎに注意



中医学気血水とは



糖尿病の中医弁証論治

黄 懷龍

当資料の転載、複製、改変等は禁止いたします。

一、はじめに

1、定 義：

糖尿病は糖代謝異常の疾患で、インスリン分泌の低下或は作用不足するため、持続的高血糖状態（或は耐糖能の低下）になって、血管障害や神経障害などを引き起こす疾病である。

中医学の「消渴病」の範疇に属する、主に多飲、多食、多尿、痩せていくなどを主証となる疾病です。一般には、多飲症状のものを「上消」、多食症状の目立つものを「中消」、多尿症状の目立つものを「下消」とする。

二、糖尿病の基礎知識

①糖尿病の発病機序

膵島β細胞 → インスリン

食物 → ブドウ糖 → 血液 → 細胞 → エネルギー

脂肪
タンパク
ビタミン
ミネラル
など

血糖過剰 → 腎臓排泄 → 尿糖 → 腎障害

神経障害

手足痛
しびれ
イボ・テツ

血管障害

網膜症
白内障
脳血管障害
など

②糖尿病の分類

- I 型糖尿病：インスリン依存性糖尿病 (IDDM)
- II 型糖尿病：インスリン非依存性糖尿病 (NIDDM)
- 二次性糖尿病
- 妊娠糖尿病 (GDM)

③糖尿病の診断

- 空腹血糖値 126mg/dl 以上。
- 随時血糖値又は2時間後血糖値 200mg/dl 以上。

④糖尿病の症状

無症状、口渇、多飲、多尿、多食、体重減少、体力低下、易疲労感、易感染などがあります。

。

⑤糖尿病の合併症

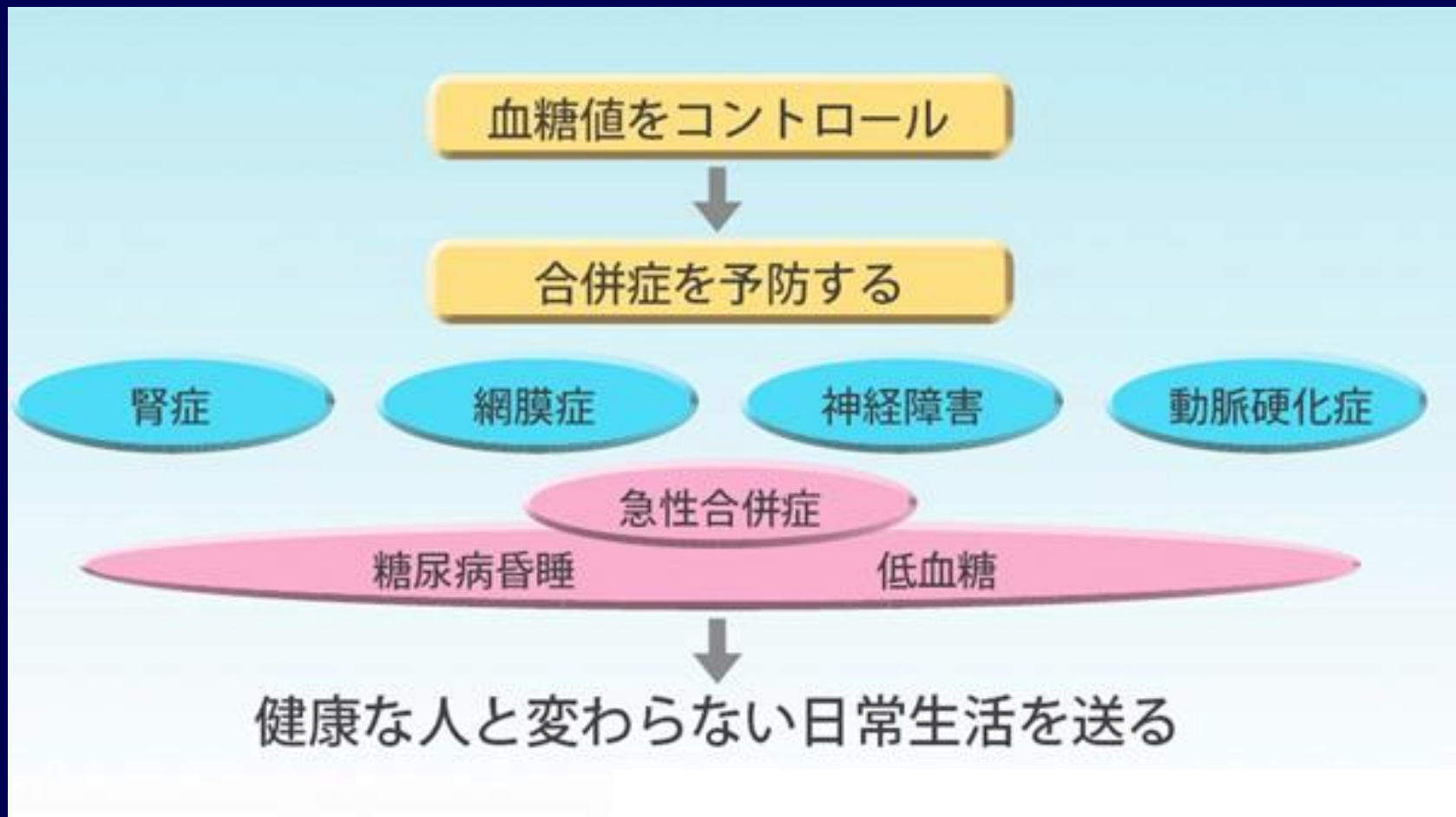
三大合併症：網膜症、腎症、神経症。
急性、慢性（血管合併症）

⑥治療

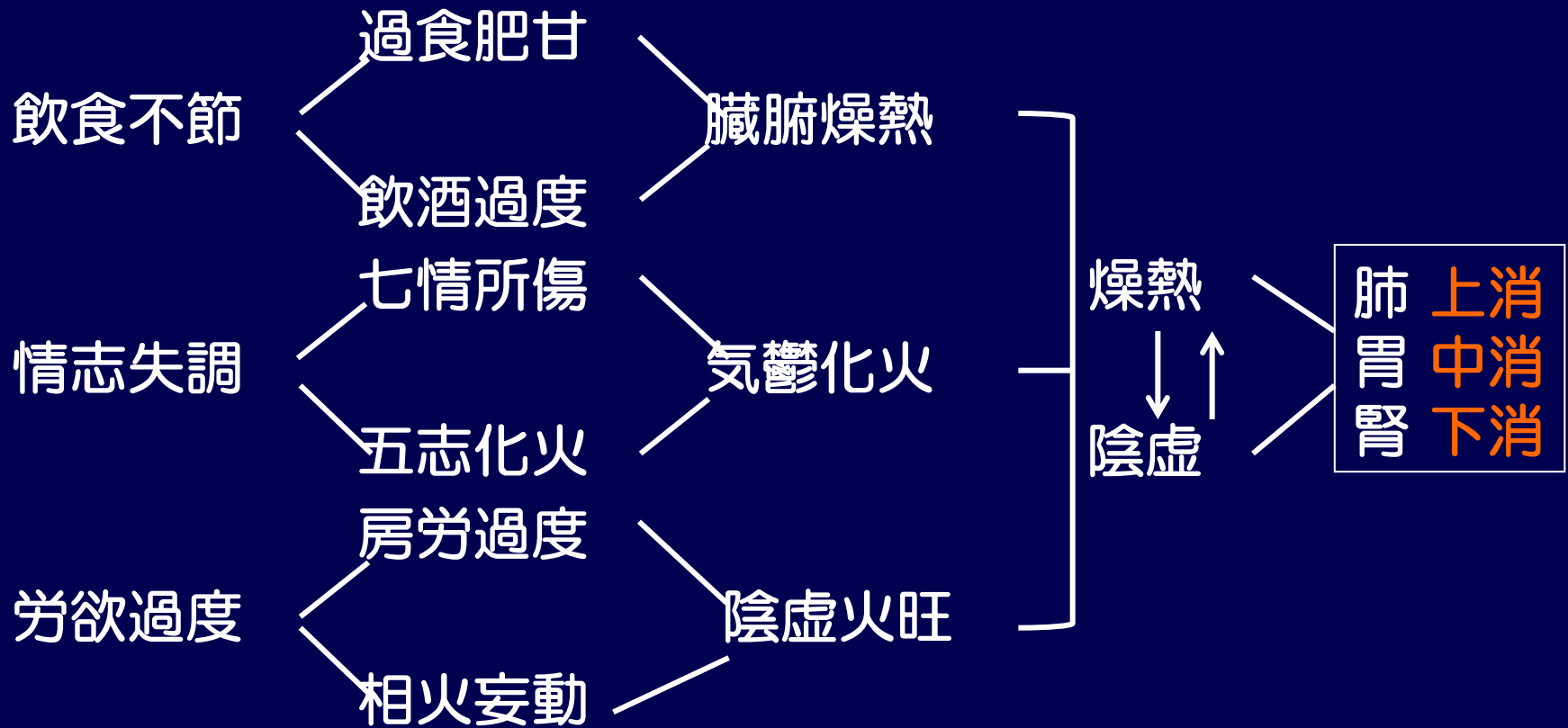
食事療法、運動療法

インスリン治療、経口血糖降下薬

糖尿病の治療



三、病因病機



①基本病態

消渴病の基本病態は陰虚燥熱である。陰虚は本で、燥熱は標です。上消は陰虚熱盛、中消は熱盛気陰両虚、下消は陰陽両虚である。本症が長く続ければ、陰虚が陽に及び、気陰両虚或は陰陽両虚になる。よく瘀血を起こすことがある。

陰虚燥熱

(合併症多い)

肺燥葉枯	——	肺癆（肺結核）
肝腎陰虚	——	白内障、網膜病変
熱結絡阻	——	瘡瘍腫毒（毛嚢炎など）
風痰阻絡	——	脳卒中
陰損及陽	——	浮腫（糖尿病腎症）
陰津虧竭	／	ケトーアシドーシス
虚陽上浮	——	
陰遏陽亡	——	陰陽離決＝危険

- 肺燥 → 陰津虚損 → 治節機能が失われ、多
• 飲した水は津液に転化
• 輸布できず、直接下に
• 降りる、よって多尿に
• なる。
- 胃熱 → 熱盛傷陰 → 消穀善飢
- 腎虚 → 陰虚内熱 → 陰損及陽

②糖尿病に対する再認識

伝統的な三消弁証に拘ることなく、現代医学を取り込んで、無症状であっても糖尿病に対しては早期から治療を開始する。

陽と陰の不均衡

《素問・経脈別論》「食気入胃、散精於肝、淫気於筋、食気歸心、淫精於脈。脈気歸於肺、肺朝百脈、輸精於皮毛」。

精気の生成

食物（水穀）→脾胃の化生 → 肝心

精気の消耗

→ 肺の布散 → 四肢百骸

・ ③病因病機の再認識

- ・ 痰湿鬱熱：飽食・ストレス、痰熱内生（初病因）
- ・ 気陰両虚：高浸透利尿、脱水津虧
- ・ ●気虚とはランゲルハンス島がインスリンを分泌する能力が低下。
- ・ ●ブドウ糖の利用できないため。
- ・ ●陰虚とはインスリンの作用不足。
- ・ 腎 虚：封蔵不足、納気不足と気化作用低下
- ・ 瘀 血：高血糖、血液の粘稠度が高く

弁証ポイント

1) 病位の弁別

	主な症状	病 位	病機特徴
上消	多飲	肺	肺燥
中消	多食	胃	胃熱
下消	多尿	腎	腎虚

2) 標本の弁別

本： 陰虚

標： 燥熱

初期：主に燥熱

進行： 陰虚十燥熱

・ 3) 本証と合併症の弁別

- ・ 本 証：多飲・多食・尿多・痩せる
- ・ 合併症：肺癆・白内障・雀盲・耳聾・癰疽・中風
- ・ 昏厥・水腫

治療原則

- ・ 1) 基本原則：清熱潤燥・養陰生津
- ・ 2) 具体治則：上消・中消・下消を分けて治療する
- ・

三、弁証論治

1、上 消：肺熱津傷

【特徵】 口渴引飲

【症狀】 口渴乾燥、頻尿、尿多、舌邊尖紅、苔黃
脈洪數

【治療】 清熱潤肺、生津止渴

【方藥】 消渴方加減（地黃、二冬、知母、黃連、沙參
天花粉、葛根、甘草）

玉泉丸、二冬湯

2、中 消：胃熱積盛

【特徵】 多食善飢（消穀善飢）

【症狀】 口渴、胸中煩躁、疲勞感、瘦せる、尿多、
舌紅、苔黃、脈滑実有力

【治療】 清胃瀉火、養陰増液

【方藥】 玉女煎加黃連、山梔子、
白虎加人參湯

3、下 消：腎虚失摄

1、腎陰虚損

【特徴】 尿多、混濁または甘味がある、口渇

【症状】 多尿、口舌乾燥、視力低下、舌紅脈細数

【治療】 滋陰固腎

【方薬】 六味地黄丸、知柏地黄丸、杞菊地黄丸

2、陰陽両虚

【特徴】 尿多， 脂肪のように混濁する

【症状】 多尿口渴、腰膝酸軟、四肢冷え、
インポテン、脈沈細弱、舌淡苔白

【治療】 温陽滋腎固摂

【方薬】 金匱腎気丸、牛車腎気丸
＋覆盆子、桑螵蛸

4、合併症の治療

合併症の治療には弁証論治の基礎の上に、症状に基づいて以下の方薬で加減する。

網膜症、白内障	——	補肝腎養目精	——	杞菊地黄丸
神経症、しびれ	——	補腎養筋	——	牛車腎気丸
感染症、毛嚢炎	——	解毒活血	——	五味消毒散
腎症、腎不全	——	補腎健脾	[	八味地黄丸
		降濁解毒活血		桃核承気湯
				など

5、エキス剤の用い方

一般陰虚：白虎加人参湯、滋陰降火湯

心陰虚：清心蓮子飲

腎陰虚：六味丸、滋陰至宝湯

肺陰虚：清肺湯、麦門冬湯。

気陰両虚：炙甘草湯、啓脾湯

陰陽両虚：八味地黄丸、牛車腎気丸

陰虚火旺：滋陰降下湯；

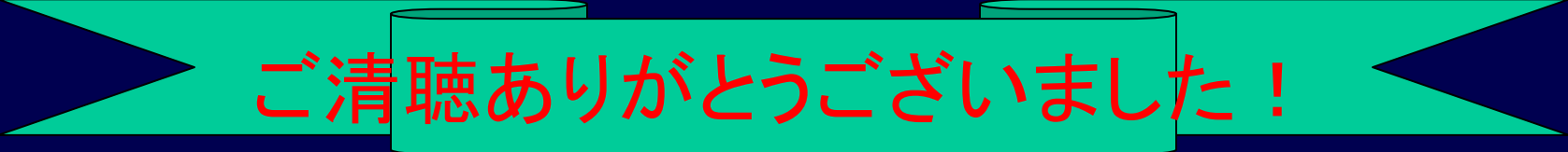
瘀血症：四物合茯苓丸、当帰芍薬散

麦門冬湯

処 方 (主治)	処方構成 (効能)	臨床応用
麦門冬湯 (肺胃陰虚)	麦門冬 (潤燥・生津・止咳) 粳 米 (滋養・生津) 半 夏 (燥痰・止咳・止嘔) 人 参 } (益胃気・生津) 大 棗 甘 草	肺陰虚： (空咳、咽喉の乾燥感と刺激感、口渇) 胃陰虚： (食欲不振、乾嘔、便が硬い、熱感) 舌紅苔少

白虎加人参湯

処 方 (主治)	処方構成 (効能)	臨床応用
白虎加人 参湯 (清熱生津 、益氣)	石膏：清熱瀉火 知母：清熱滋陰 甘草：調和緒藥 粳米：和胃生津 白虎湯 人参：補氣生津	氣分熱盛：壯熱面赤、煩渴引飲、汗 出惡熱、脈洪大有力或は 滑数。 + 但し汗多く、脈大、無力 等の津氣兩傷の証、と出汗、 背中にやや惡寒、身熱口渴 等の暑病の津氣兩傷の証。



ご清聴ありがとうございました！